



山浦先生自筆書画

ててこられました。

戦後の荒廃した苦難  
 昭和四十三年から長野陸上競技協会理事長の要職に就かれ、組織の強化、指導者の育成に献身的に尽力されました。そして日本陸上競技連盟評議員として、数多くの全国大会で競技運営面において卓越した手腕を発揮されました。特に昭和五十一年全国高等学校総合体育大会の開催にあたっては、長野陸上競技協会副会長、長野県高等学校体育連盟陸上競技専門委員長として、大会運営の陣頭指揮に立ち立派に成功させ、今までにない競技運営と高い評価を得ました。

また、昭和二十一年長野県体育協会の発足から理事として活

にわたり、その残された足跡は実に偉大でありました。

日体大の前身の日本体育会体操学校高等科卒業後、現在の岩村田高校・篠ノ井高校教諭を歴任され、昭和二十六年長野吉田高校に赴任し、以後昭和五十年までの二十五年間在職されました。その間生徒の指導に心血を注

躍され、昭和四十一年には競技力委員会常任委員、副理事長、体力向上委員長、評議員の要職に就かれ、県民のスポーツ振興のために大いに貢献されました。思えば先生は陸上競技一筋の人生を歩まれ、陸上競技の発展に寄与されました。その功績により、昭和三十年全国高等学校体育連盟陸上競技部会長表彰、昭和三十九年長野県体育協会スポーツ功労者表彰、昭和四十一年に日本陸上競技連盟秩父宮章受章、昭和五十五年長野県教育委員会教育功労者表彰、昭和五十七年文部大臣表彰、平成三年勲五等瑞宝章受章等、数々の栄誉を受けられ受章の栄光に浴されました。

スポーツの振興に一生を捧げられました偉大な先生に、私は尊敬の念を捧げます。

## 第二節 スポーツ

### 一 バスケットボール

#### 十五年間の思い出

元教諭 石坂 喜久雄

私の教師時代の約半分を長野吉田高校にお世話になり、いろいろと勉強と経験をさせて頂き、深く感謝しております。思えば木曾谷より県庁所在地の長野市へ赴任を命じられ、長野吉田高校へ着任してから四十数年過ぎようとしています。

当時は若く希望に満ちていました。そのような状況の中で野球部監督を依頼され、素人ながら監督を引き受けました。素人監督を部員は暖かく迎えてくれ、私もその期待を裏切らないように頑張りました。

昭和四十六年全国高校野球長野大会では、前年秋の長野大会と同じく決勝戦まで駒を進めました。残念にも須坂商業に4-1で敗れ、甲子園の夢を断たれてしまいました。その時のメンバーは豪腕林投手を中心に、二年生四人を含め全員野球のチームでした。

四年間野球生活を送り、その後専門のバスケットボール部顧問

問になりました。県大会では常に上位を占め、部員も全国大会を目指しながら練習に励み、頑張ってくれました。昭和五十五年には三十二年ぶりに県下を制覇し、徳島のインターハイに出場。翌五十六年には川崎のインターハイへと余裕をもって出場し、東海四、地元法政二、鹿児島川の川内と連破、優勝した能代工に敗れましたが、全国ベスト8の栄冠に輝きました。昭和五十八年は長身者も不在でしたが、安城のインターハイに出場できました。

昭和六十年に須坂高校に転出いたしました。その後も伝統は引継がれ、現在もバスケットの強豪校長野吉田の名は全国、県下に鳴り響いております。今後の長野吉田高のご活躍をお祈りします。

#### バスケットボール部設立のころ

第四十三回卒業生 小林 慧歩

上水内農学校のバスケットボール部は、昭和二十一年春に設立した。顧問は、数学の渡辺三郎先生（学生時代サッカーをやっておられ、後年県サッカー協会会長を務められた）がやって下さった。後に、石坂均先生も顧問に加わって下さった。

当時、県内の中学校（旧制）は、戦前にバスケットボール部があり、戦後バスケットボールが出来なくなった時、OBが指導をしていた。しかし、我が校は指導者がいない。そのよ

った。そして、その年の長野市中学五校リーグ戦で、創立したばかりの我が校が優勝した。更に、第一回国民体育大会県予選で二位になり、県代表として信越地区予選に出場した。

戦時中、農学校敷地内に、長野青年師範学校（そのご信州大学教育学部）があった。昭和二十一年春に、この青年師範に、地理の教授で馬渡孟先生が赴任されて来た。先生は、戦前に東京文理科大学（東京教育大↓筑波大）バスケットボール部キャプテンとして活躍し、全国制覇をしている。先生は、早速バスケットボール部を作り、農学校の体育館で練習をしていた。そこで、農学校のバスケットボール部も、先生に指導をしてもらいながら、一緒に練習をさせてもらうことが出来、だんだんとバスケットボールらしいものが出来るようになってきた。

翌年、学校制度が変わり、長野農業高等学校となった。その夏休みに、文理大が、城山小学校の体育館で合宿練習を行った。その時、昼休みや練習が終わった後に、我々は押しかけて行き、大学選手に指導してもらい、技術的にますます上達した。ところが、二十三年に、渡辺先生は松本県ヶ丘高校へ転任。次いで、馬渡先生が静岡城北高校へ転任、石坂均先生も転任と我々を育てて下さった先生方は、皆去ってしまった。

馬渡先生は去るにあたり、吉井四郎先生を紹介して下さいました（一回だけ井上一男先生が来て下さったが）。吉井先生は、当時東京教育大学（現筑波大）の監督をしており、全日本学生選手権や全日本選手権で優勝させている。後に、東京オリンピックの時ナショナルチーム監督も務められた。この先生が、昭和二十

近年、私立高校は、優秀な選手を集めて運動部活動に力を入れている。従って、全国大会、都道府県代表は殆どが私立高校である。しかしながら我が校は、県内で私立高校を相手に、現在でも優勝または準優勝と頑張っており、創立当時の伝統をしっかり維持していかれる。この現象は、我が部を築立って行った仲間が、ミニバスケットの指導をし、更には、中・高校の教員になり、部の指導をしていることが、大きな要因になっていると思う。

素晴らしい吉田高校バスケット

OB会会長・第四十七回卒業生 小林 和夫

本校バスケットボール班は、終戦の混乱が収まらない昭和二十一年、当時の上水内農学校に、現在では到底想像もできない、薄暗くて狭く天井の低い体育館で誕生しました。

ボールやシューズも満足にない時代でしたが、良き指導者と先輩諸氏の頑張りが相まって、昭和二十四年、創部四年目にして第四回国民体育大会に出場するという快挙を成し遂げました。以系六十一年我が吉田高校は長野県内高校バスケットの名門校として、インターハイ出場一四回、全国高校選抜優勝大会出場四回、国体出場三回と輝かしい成績を残しています。

ちなみに別掲の「栄光のあしあと」によると、昭和二十二年から行われている長野県高校選手権大会（インターハイ予選）は本年度（二〇〇八）で六二回になりましたが、吉田高校が準決



昭和26年 全日本総合選手権（神戸）に出場したチーム

四年から二十八年頃まで、我が部の春・夏の合宿練習に来て指導をして下さった。そして、次回の合宿までの練習スケジュールを立てて下さり、それに基づき、故小林信夫マネージャーが練習を仕切り、毎日の練習に励んだ。我々は、このように他校より常に新しい技術を身に付け、ますます強力なチームとなっ

た。当時の顧問は竹前勝先生であった。そして、部創立わずか四年で、初代の先輩達が成し遂げられなかった国体県予選で優勝し、第四回国民体育大会へ出場した（この頃は、インターハイがなく、高校の全国大会としては国体が唯一の大会であった）。更に、関東地区の実業団や大学といった大人を相手にして（当時長野県は、関東ブロックに入っていた）優勝し、昭和二十六年一月神戸で行われた全日本総合選手権に関東地区代表として出場した。創立当時の先生方は、みな故人となってしまう。立派なバスケットボール部を作ったことへの感謝と共に、その伝統を引き継いでゆくことを誓いながら、ご冥福申し上げます。

勝以上に進出したのが三七回、また長野県高校新人大会では五八回中今年の優勝も含めて優勝九回、準決勝以上が三四回と、六十年にわたり県大会に出場した半数以上でベスト4に進出するという抜群の成績を収めているのは素晴らしいことだと思えます。

特にここ十年はベスト4の学校が固定化しており、吉田高校以外はすべて選手を補強できる私立高校である中、公立の吉田高校が孤軍奮闘していることを誇りに思っています。これもひとえに、歴代顧問の先生方の熱心なご指導と、これに応えた部員たちの汗と精神力の賜と深く敬意を表する次第です。



平成20年度インターハイ予選

高校のクラブ活動の場合、自分たちが現役に活躍していた同年代の仲間とは、生涯の友としてまとまる傾向が強いのですが、吉田高校ではOB会の組織が確立されていて、高校を卒業すると自動的に「吉田クラブ」へ入会することになっています。吉田クラブの目的は「会員相互の親睦と、現役チーム強化の全面的な援助」であり、年四回発行される「吉田だより」の新聞で会

年度	高校選手権大会			高校新人大会		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
53	東海大三	長野吉田	県ヶ丘	県ヶ丘	長野吉田	東海大三
54	県ヶ丘	東海大三	屋代	県ヶ丘	長野吉田	東海大三
55	長野吉田	県ヶ丘	飯田長姫	長野吉田	東海大三	岩村田
56	長野吉田	県ヶ丘	東海大三	東海大三	岩村田	須坂
57	東海大三	岩村田	篠ノ井	県ヶ丘	須坂東	長野
58	長野吉田	須坂東	県ヶ丘	東海大三	上田	長野吉田
59	東海大三	上田	長野吉田	篠ノ井	長野吉田	長野
60	長野吉田	篠ノ井	染谷丘	長野吉田	染谷丘	東海大三
61	長野吉田	染谷丘	伊那北	長野吉田	須坂田	川
62	田川	長野吉田	須坂	東海大三	田川	須坂
63	東海大三	長野吉田	野沢北	長野吉田	東海大三	長野
1	長野吉田	東海大三	長野	上田	東海大三	長野吉田
2	須坂	長野吉田	東海大三	長野吉田	東海大三	長野
3	長野吉田	佐久	東海大三	東海大三	長野吉田	佐久
4	東海大三	長野吉田	田川	松商学園	須坂	長野吉田
5	東海大三	松商学園	長野吉田	東海大三	松商学園	長野吉田
6	松商学園	東海大三	須坂	東海大三	松商学園	長野吉田
7	東海大三	松商学園	岩村田	東海大三	岩村田	長野吉田
8	東海大三	須坂	松商学園	東海大三	長野吉田	松商学園
9	東海大三	松商学園	長野吉田	長野吉田	佐久長聖	東海大三
10	東海大三	長野吉田	松商学園	長野吉田	東海大三	松商学園
11	東海大三	佐久長聖	松商学園	松商学園	東海大三	長野東
12	長野東	長野吉田	東海大三	東海大三	佐久長聖	長野吉田
13	長野吉田	東海大三	佐久長聖	松商学園	東海大三	長野吉田
14	松商学園	東海大三	長野吉田	東海大三	松商学園	長野吉田
15	松商学園	東海大三	長野吉田	東海大三	松商学園	長野吉田
16	東海大三	松商学園	長野吉田	長野吉田	東海大三	佐久長聖
17	東海大三	長野吉田	松商学園	松商学園	佐久長聖	長野吉田
18	松商学園	長野吉田	東海大三	松商学園	長野吉田	東海大三
19	東海大三	佐久長聖	松商学園	松商学園	東海大三	長野吉田
20	東海大三	佐久長聖	長野吉田	長野吉田	松商学園	東海大三

人材は、現在各方面で活躍していますが、誰しも高校時代のバスケケットが忘れられずに、教員になって後進の育成に汗を流す者も多数います。また、環境は違っても吉田高校現役チームの活躍を楽しみに、時間の許す範囲でバスケットボールに関心を

持っているようです。バスケットボールを総括する県協会・市協会の役員も吉田高校の卒業生が多数要職を占め、ボランティアで活躍しています。協会が主催して小学生にバスケットボールを教えるミニバ

栄光のあしあと

年度	高校選手権大会			高校新人大会		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
昭22	松本深志	長野商	伊那北			
23	岡谷工	松本深志	松本深志			
24	長野農	諏訪清陵	長野北			
25	松本深志	長野農	伊那北			
26	長野北	長野農	伊那北	松商	長野農	長野北
27	県ヶ丘	長野北	伊那北	清陵	長野商	長野北
28	諏訪清陵	長野商	長野北	松本深志	長野北	長野北
29	松本深志	長野農	長野北	上田松尾	松本深志	松本深志
30	長野北	松本深志	松本深志	長野北	上田松尾	上田松尾
31	長野北	長野商	長野北	上田松尾	長野北	長野北
32	上田松尾	長野商	諏訪清陵	長野	松本深志	松本深志
33	長野商	長野	松本深志	長野	新濤工業	新濤工業
34	長野	長野商	長野	三	三	三
35	長野	飯田長姫	飯田長姫	三	三	三
36	長野	松商	長野商	関	三	三
37	須坂西	松本深志	岡谷工	長野	松本深志	松本深志
38	長野	松本深志	松本深志	南安	飯田	飯田
39	長野	長野吉田	長野吉田	県ヶ丘	松商	松商
40	長野商	長野吉田	長野吉田	県ヶ丘	飯田工	飯田工
41	諏訪清陵	県ヶ丘	県ヶ丘	県ヶ丘	長野吉田	長野吉田
42	県ヶ丘	長野商	長野商	県ヶ丘	長野	長野
43	県ヶ丘	丸子実	丸子実	県ヶ丘	長野商	長野商
44	県ヶ丘	長野中央	長野商	県ヶ丘	長野	長野
45	県ヶ丘	長野吉田	東海大三	県ヶ丘	屋代	屋代
46	屋代	県ヶ丘	須坂	屋代	長野吉田	長野吉田
47	屋代	上田東	上田東	県ヶ丘	上田	上田
48	県ヶ丘	長野吉田	長野吉田	県ヶ丘	東海大三	東海大三
49	県ヶ丘	上田	上田	県ヶ丘	伊那北	伊那北
50	東海大三	県ヶ丘	伊那北	県ヶ丘	長野吉田	長野吉田
51	県ヶ丘	伊那北	長野吉田	東海大三	飯田	飯田
52	東海大三	長野吉田	県ヶ丘	東海大三	長野吉田	長野吉田

員同士は結ばれています。平成十九年度卒業した生徒六一期生で、クラブの総員は五〇名余になりました。最近では親子で吉田高校バスケットを卒業した例も珍しくなりました。したがって、吉田クラブの総会

では第一回卒業生から今年の卒業生まで、バスケットボールを話題に年齢を超越して懇談する、実に楽しい総会が行われています。

部活動で体育・德育を、授業で智育を学んで卒業した優秀な

スケートボール教室では、吉田高校OBが指導者として多数参加して子供たちにバスケットボールの楽しさを教え、全国大会に出場するような優秀なチームを育てた指導者もいますし、優秀な選手の才能を見いだし中学・高校と引き継ぎ、吉田高校で活躍している選手もたくさんおります。しかし長野市内で活躍し、更に吉田高校でバスケットボールを続けた優秀な選手も、学力の面から他地区の私学へ行ってしまおうのは誠に残念な現象です。

また最近では女子バスケット班の活躍もめざましく、平成十九年度の県高校新人大会では初優勝し、平成十九〜二十年度のインターハイ予選では連続3位になるなど楽しみな活躍ぶりです。

このようなOB会の活動は、長野吉田高校同窓会でも認められ、支部の一つとして位置付けられていることは有難いことです。吉田高校百周年記念事業の一環として、バスケットボール班創部六十周年記念事業が行われましたが、第一期卒業生から六十一期卒業生まで一〇〇名以上のOBが集まり旧交を温め、更なる発展を約束できました。

お前のバスケットはそんなものだったのか

第六十回卒業生 柳見沢 宏

「そこは、すぐく活れた、今はボールを置いておく部屋になってしまっていた。先日、吉田高校の体育館へ入った時、懐かしい体育

今回の「回想記」の原稿依頼があった時、ふと思いついたのは、右の『長野吉田バスケットボールクラブの記念誌』でした。私は今、教職に就いておりますが、今でもバスケットボールの指導を続けております。そして、その原点は、あの高校時代の顧問からの一言であることは間違いありません。長野市のミニバスケットボール教室で小学生に教えています。私の周りには、吉田高校でバスケットボールをやっていた者や、関わっていた者が多くおります。みんなバスケットボールの魅力に取り付けられているわけですが、そのエネルギーは高校時代のバスケットボールとの関わりであることは間違いありません。

そんなわけで、必然的にOB会である「長野吉田バスケットボールクラブの会員」となっております。今は副幹事長をやらせてもらっておりますが、以前「吉田クラブだより」の担当をしております。そこで感じたことを紹介させていただきます。



ジャンプシュート

研究室のあった、その場所へ入った時のことでした。私が高校生だった頃、今の現役のみんと同じように、インターハイ出場を夢みながら、厳しい練習をしていた、その頃のことを思い出していました。その頃は、ちょうど吉田高校バスケットボールクラブの谷間のような時期だったように思います。インターハイどころか、県大会出場をかけたの北信地区予選のこと、二日間あった初日に、屋代高校に惨めに敗れ、準決勝、決勝とあった二日目は、大会も見ずにポーと長野の街をおらぶらしていたのです。県大会は行けると思っていたし、キャプテンとしての自分の惨めさもあって、ただただポーとして、なげやりになっていた、そんな一日でした。

そして、大会も終わった次の日、当時、監督をしてくださっていた横川先生に、体育研究室に呼びつけられました。いろいろと注意やら、今後のクラブなどについて話しをしてくださるかと思いつつ、負けたからとはいえ次の日の決勝も見ずに、一日ポーとして、ぐれていた自分に一言「ヤナミ、お前のバスケットは、そんなものだったのか」と言われるのです。今思い出してみても、あの時の一言は鮮明に思い出されます。

私にあの一言がなかったら、きっと私はバスケットボールから離れていった事でしょう。私は今、中学校でバスケットボール部の顧問をやっております。未だに、私のバスケットが見つからずに困っております。困りながら、悩みながらも、そのバスケットボールの魅力を感じております。続けて来て良かったなと思っております。これからはポーとバスケットボールを続けていきたいと思っております。

そして、その場所に行くたびに、私は、きっと「自分のバスケット」を問い直すことでしょう」

(昭56『クラブ三十五周年記念誌』)

平成四年十一月十二日 第1号を発行 「吉田クラブだより」の編集を担当していた時、私は長野吉田高校バスケットボールクラブのつながりの大切さを、すぐ感じました。今、改めて会報を見返してみました。第1号のサブテーマは、「仲間の集う場所」となっています。仲間からの一言を大切にしながら、編集を続けていたことを思い出しています。吉田クラブの人脈を感じました。第2号は、「会報はマスメディア」としました。会報を継続することは、吉田クラブの充実につながることを確信しています。利害関係のない、先輩と後輩の組織です。第3号は、「今年も八月十四日です」となっていました。お盆の真ん中で、年一度の顔合わせの会です。毎年総会を兼ねて開催してきました。第4号は、「平成五年度の総会を終えて」となっています。この年の徳島国体に、吉田クラブから二名の選手が出場しています。第5号は「東京に支部がある？」で、熱のある先輩の存在を確認しました。第6号は「吉田クラブ総会開催ご案内」となっています。このころはどうも会報がマンネリ化してきました。そして、第7号は、見開きのカラーグラビアで、「懐かしい顔、カオ、カオ」を発行することができました。あの時の編集スタッフに、本当に感謝です。

今まで全く知らずに話してきた人が、実はクラブの関係者であったり、吉田高校同窓生であったりすると、そのことが分かった瞬間に、まるで今までもポーと付き合ってきた人のような親近感を覚えるのです。良いですよ。私はこれからも、このつながりを大切にしたいと思います。

選手、そして審判員

第六十七回卒業生 荒木 博明

私が中学三年生の時、現在の旧体育館で長野県高校総合体育大会バスケットボール競技の男子決勝戦、松本県ヶ丘高校対屋代高校の白熱した試合における高校生のプレーの凄さに感動し、自分が将来このような舞台上でプレーすることを夢見て長野吉田高校へ入学をした。

私の入学時の三年生は大型チーム(当時としては)で、三重インターハイ出場を果たした。同期のチームメイトは私も含めて三年生との折り合いが悪く、三年生が引退した後に顧問の勧めと配慮で練習を再開した。当然、目指すはインターハイ出場であった。私の代は翌年に開催される昭和五十一年の松本インターハイを控えての県全体の強化策として、ベスト4のチームでリーグ戦を実施した。結果は優勝した東海第三高校には勝ったものの、松本県ヶ丘高校と伊那北高校に不覚を取り、夢は実現できず、恩師の横川先生や石坂先生に対し、「なぜ負けなければならなかったのか!」と詰めより、涙した青春は一生忘れない。また、ハワイのヒロ高校対長野県高校選抜チームの日米対抗戦に出場しての11得点やノーマークを防ぐために相手選手に対して体当りをしてのアンスポーツマンライクファール、さらに、少年男子国体チームの主将として北信越ブロックを戦うが、新潟、石川に屈して本国体への出場の夢が絶たれたこと等、高校時代での様々な体験は私の歩む人生の基礎を築いてくれた。

その後、私はA級公認資格を取得し、長野市、長野県、北信越ブロック審判長を務めた。日本リーグ、WJBL、インターハイ、国体、全日本学生選手権、全日本学生オールスター戦等、幾つもの試合を担当させていただき、それぞれの試合における様々な人間模様から、バスケットボールのみならず、人生の見聞を広げることができた。今は、審判の要職は退いたが、一審判員としてフィットネスが続く限りコートに立ち続け、後進の指導に役立ちたいと思っている。

スポーツは「するスポーツ(プレイヤー)」、「支えるスポーツ(指導者・審判・競技役員)」、「観るスポーツ(観戦者・応援者)」で成り立っている。いつまでもなんらかの形でバスケットボールに携わりたいと思うが、是非ともこれからは、母校のインターハイ出場を応援する「観るスポーツ」で携わることになりたいものである。これからの後輩諸君の活躍に期待する。

母校に帰る

男子班顧問・第六十四回卒業生 廣田 信一

私は昭和四十五年入学の六十四期生です。中学時代は陸上競技の走り高跳び・短距離選手でした。当時の吉田高校バスケットボール班顧問の横川先生がわざわざ中学まで足を運んでいたで、「吉田に来てバスケットボールをやらないか」と声をかけていただいたことが、子供心に変なほど感ずいたことを懐かしく思い出します。そのことが今の私の人生の導きとなった

そして、高校時代の恩師、先輩、後輩、仲間たちに感謝しながら昭和五十一年三月に卒業した。(縁あって、我が家の次男、三男も吉田のバスケットボール部に所属し、廣田先生に鍛えていただいた)

その後、教員を目指し国士舘大学体育学部へ進学し、昭和十五年に保健体育教諭として長野県へ帰ってきた。飯田高校、中野西高校、長野西高校と、各高校でバスケットボール部の指導をさせていただきながら審判の世界へ足を踏み入れ、日本公認審判員資格を取得したのが二十八歳の時である。当時、私の目標と憧れは吉田の一つ上の先輩、伊藤幸広さんであった。軽快なフットワークと力強い正確な判定、各チームから得ている信頼等どれをとっても一流であった。何回も一緒に北信越ブロック大会のゲームに出かけ、大変お世話になった。

私は技術の上達を目指し、色々なジャンルの試合を経験するために日本全国へ修行に出かけた。東海学生リーグ一部の中京大学対愛知大学の試合で、残り何秒かで私の吹いた笛がファールではあるが、吹かれた中京大学が損をしてインカレ(全日本学生選手権)への道が絶たれた。試合終了後、「ファールをされて損をするスポーツがあつていいのか! 貴様はこの審判だ!」と中京大学監督の今は亡き小林平八先生に追いかけられ、審判控え室へ逃げ帰った記憶は脳裏を離れない。今、審判の世界で言われている「スメル・ザ・ゲーム」(試合の雰囲気、匂いを感じなさい)とか「アドバンテージ・ディスプレイ」(有利、不利を見極めて)は、そのとき命がけて体験した。

ことは言うまでもなく、感謝に堪えないところです。

高校入学から約二年間のクラブ活動、バスケットボールをすべてわからぬまま終わることに戸惑い、自分の進路を考えたとき、大学でバスケットボールを続けてみよう。そして出来るものであれば高校体育教師、更に出来るものなら母校に帰って後輩の指導——との希望をもって、日本体育大学に入学。大学卒業二年目に念願の教員として採用され、初任校の中条高校で六年間、皐月高校で十二年間、そして平成八年度から母校吉田高校と念願が叶い、今年で十二年目を迎えております。その間、チームを強くするにはどうすればよいか、良い指導者になるためににはどうあるべきか、家庭を顧みずただただバスケットボールに明け暮れる日々が続いております。



ベンチで指揮をとる廣田コーチ(左端)

さて、吉田高校に赴任して三年目に、初のOB指導者として数多くの実績を残された歴代の指導者から引き継ぐことになったわけですが、肩のしにかかる責任

を背負いながら全力を注ぎ指導にあたってまいりました。平成十九年まで十年間の指導において一五〇名を超える生徒に恵まれ、選手を集める私立高校と、進学校であり唯一の公立高校として競ってまいりました。全国大会出場三回、北信越大会出場一六回うち三位二回、ベスト8一三回、県大会優勝五回、準優勝九回、三位一〇回、北信大会優勝三五回と、ある程度の実績が残せたのではないかと感じております。高校時代からの夢が半ば叶い後輩指導十年日が過ぎようとしております。

全国大会出場の思い出としましては、引き継いだ平成八年、県総体2位で全国大会出場ならず。そして、十月選抜大会県予選で松商学園、東海大三、佐久長聖と私立三強に勝利して、吉田として八年ぶり三回目の全国選抜大会出場を果たすことが出来ました。もちろん、自分としても初の全国大会出場でした。

一回戦群馬代表高崎商業と戦い、後半残り5分相手の10点リードを逆転して二回戦に進出、二回戦は北海道の東海第四に20点差で敗退、全国レベルの敵しさを痛感しました。原田双子兄弟・松田君・塚田君・福沢君・山下君、よく頑張ってくれました。

平成十三年、県高校総体において十年ぶりの優勝、熊本インターハイの出場権を手に入れました。自分として初のインターハイ出場、念願がかなったわけですね。初戦の相手は、強豪ぞろいの関東二位の東京代表世田谷学園と戦うことになりました。前半は一進一退の見ごたえのある攻防、スタートで出遅れはしたものの50-49、1点負けで勝負は後半に。後半に入って逆転はするが追いつ追われつ、残り7分で10点リード、終わってみれば

に、御礼申し上げます。百周年の大きな節目をステップに、長野吉田高校がますます繁栄、発展することを御祈念いたしまして思い出の記といたします。

台湾遠征記

男子班顧問 馬場 信義

平成十八年十二月十六日、男子バスケットボール班父母会忘年会で、塚田壮一父母会長から、チームの台湾遠征の壮大な話を聞いた。驚きと半信半疑の気持ちだが整理できないうちに、遠征の話がとんとん拍子に進み、一月中旬に選手全員が参加意思を表明。遠征は平成十九年の四月上旬とのことで、裏方役としては二カ月半で全員の渡航準備をしなければならなかった。まずは、渡航二カ月前までに提出しなければならない県教委や文科省への申請書類と渡航者名簿の作成。選手たちのパスポート申請の世話。渡航の際の保険手続きの世話。書類の書き方が不慣れた生徒が多く、いつも旅行代理店への提出期限が過ぎてから全員分が揃うという手際の悪さを肝を冷やした。バスケットボール協会への対外試合の申請等は廣田監督や塚田父母会長が行ってくれた。台湾についての事前学習冊子も作成し、成田空港までのバスのなかでマイクを使って講義した。この遠征には、三年生一四名、二年生一八名、監督・顧問二名のほかに、父母会から三名、関係者三名も参加してくれた。

平成十九年四月六日（金）朝六時、バスで学校出発。午後二

時100-90の快勝でした。二回戦は組合わせの悪戯か、関東大会すべて100点ゲームのダブルスコアで1位となり全国優勝を狙う千葉代表市立柏と戦いました。センター203cmと192cm、フォワード188cm・186cmの大会ナンバーワンの長身チームですが、「負けでもともと。暴れて終わろう、ダブルスコアにならないように70点以上は取ろう！」を目標に、試合に臨みました。結果は109-75、負けはしましたが、私も生徒達も全国の大舞台で価値ある体験をして帰長しました。同窓生後輩の息子大屋君と池田君・小山君・久保田君・北沢君・山田君よく頑張ってくれました。

平成十四年、全国選抜大会県予選では、準決勝で佐久長聖に勝利して松商学園との決勝戦。一〇回試合をして一回も勝てないだろうという下馬評の中、試合残り1分を切ったの大逆転で勝利して六年ぶり優勝で全国大会出場を果たしました。全国大会は松江東との初戦、一、二年生だけで戦い残り10分までシューゲームで善戦したものの、18点差で敗れました。山田兄弟・阿藤君・渡辺君・越坂君・三澤君・長田君・畑山君・丸山君・田中君・奥田君、よく頑張ってくれました。

最後になりますが、先輩方が築きあげた吉田高校バスケットボール班の伝統を汚すことなくやってこられたのも、今まで関わった生徒全員と、活動を全面的にバックアップしてくださった校長先生はじめ学校職員の皆様、父母の皆様、OB会の方々、そしてバスケット関係者の皆様のお陰であると、つくづく思っております。この場をおかりして心から感謝申し上げます。

時十五分、成田空港出発。台湾時間午後四時四十五分台北空港着。翌日、朝九時より台北市立松山高級中学校（日本では高校）と親善試合。相手は台湾5位の強豪チーム。190cm以上の選手が4人。試合に先立つセレモニーで、相手校関係者や選手たちの前で学校長代理としてコメントした。その第一声を中国語で「我是從日本來的（日本から来ました）」としたが、一生懸命練習したつもりだったが、台湾の選手たちは皆ボカんとした顔を



台湾遠征チーム（故宮博物館前で）

していた。外国の発音は難しい。

試合は前半、相手の高さのパワーとスピードに圧倒されて何もできないまま終わってしまった。後半は長野吉田らしい激しいディフェンスが出るようになり、追い上げたが50-110で大敗してしまった。試合後は両校の選手が入り混じった合同練習をしたり、昼食も教室で一緒に摂るなど友好に努めた。印象的だったのは、教室に置いてあったコミック『スラムダンク』の話題で、両校の選手がすぐに和気あいあいとなったことだった。スポーツ文化は世界共通だという点、日本のコミックの影響力もたいしたものだと感心してしまった。

この遠征で、台湾の高校でも、日本と同じような基本練習を大切にしていることを知った。また、台湾では全国で上位4位以内に入った高校の選手は、進学先の大学を自分で選べるという制度があることも知った。このような制度が選手のやる気を引き出しているのではないかと感じた。

翌日は全員で台北市内を見学し、四月九日(日)台北を発って、夜の十一時四十五分頃、全員無事に長野吉田高校に戻ることができた。

#### 遠征を終えて

第七十回卒業生 塚田 壮一

バスケットボールを基軸においた国際交流を、関係各位の多大なご協力の下、実現出来たことは、感謝の気持ちで一杯です。

つくり、本校卒業生の国際社会での今後益々の活躍を期待していきたいと思っております。

子供たち総てに与えられた「それぞれの無限の可能性を發揮出来るようにするために」「いい夢を見つけれられるように」——PTAとして、また同窓会の一員として力になれたらと思っております。

(平成19年「同窓会報」)

#### 創部六十周年記念によせて

女子班顧問 佐野浩一郎

平成十年十月五日(日)、長野市運動公園総合体育館を一日借り切り、長野吉田高校百周年記念兼吉田高校バスケット部六十周年記念として、招待試合と祝賀会が盛大に開催されました。

先ず、忙しい中を駆けつけてくださった日本バスケットボール協会事務局長の松岡様をはじめとする来賓の方々、仲間を集い来て下さったOB・OGの皆様、保護者の皆様、この会を実施するにあたり尽力していただいた関係各位にお礼を申し上げます。

当日は、創部六十年という長い伝統の中、ずっと県下高校バスケット部の雄として譲らない男子バスケット部が、信州大学を招き招待試合を行い、吉田高校卒業の現在信州大学で活躍中の先輩方も交え熱戦を繰りひろげました。その後は、男子バスケット部の監督率いる中学生の交流試合が行われ、最後に現役対OBの試合を行いました。創部およそ二十年となり、近年では常に県下で上位に位置し、平成十九年の新人戦では初となる県制覇をした女子バスケット部が、吉田高校バスケット部OG・OBが監督をし

現代の社会は、日頃の生活におきましても、諸外国との交流無くしては成り立たなくなってきました。そのような環境下の中で、高校教育またその後の大学教育、そして実社会での本校の学生たちの今後の活躍を期待していくには、高校時代における国際化社会を五感で感じることがとても有意義であるという想いから、父母会を中心に、学校関係各位と調整を取りながら、本校初の国際交流を実現しました。

日程は平成十九年四月六日から九日の三日四日で、バスケットボールの強豪校(本年台湾国内5位)で、かつ文武両道の進学校である「台北市立松山高級中学校(高校)」と国際親善交流セレモニーの後、ゲームそして昼食をはさんで国際交流を行い、言葉の壁を越えて盛り上がりまわりました。

コートの上では、一九〇センチを超えるメンバーが揃う相手チームが優勢に進め、体当りで国際試合を体感しました。昼食後の交流会では、本校主将、班長とも片言の中国語で挨拶を行い、語学の習得の意味や、相手に中国語の伝わった喜び、感動を体験しました。その後は黒板を使って筆談をしたり、はしゃいだりと、お互いに充実した様子でした。共に同じ時代に生まれ、国境を越えたり子供たちが、スポーツ・文化・歴史を共有して、今ここに交流出来た事は、生徒たちには掛け替えのない体験になったことでしょう。

滞在中には、故宮博物館、忠烈司なども見学し、海外から見ると台湾、中国、日本の歴史に触れる事が出来、また数々の食文化にも触れ、台湾の方々の温かい心にも触れ、改めて国際社会の中の日本、そして日本人としての自覚を子供たちと共有出来ました。国際人としての視野が少なからずとも広がったことを実感しました。また彼らにとって「大きな心の財産」を残すことが出来ました。

今後は、長野吉田高校において、バスケットボールだけでなく各スポーツ、そして音楽など芸術・文化を通して、国際交流を盛り上げると共に、文武両道の吉田高校ならではのユニークな教育環境をている塩尻志学館、小諸商業高校を招き、親睦試合を行いました。また、その後OGチームも交え、和やかな中バスケットを楽しむことができました。しかしながら、現役との交流試合においては、OB・OGともに、現役生が手を抜いたわけではなく勝利をし、改めて卒業後も活躍している先輩方の力を感じ、吉田高校バスケット部の奥深さを思い知りました。そして、何より、コートでプレーをせずとも熱心に現役生へエールを送り、仲間とともに応援をする姿から、バスケットを愛する気持ち、後輩吉田のチームへの熱い思いを感じました。

夜は、昼参加できなかった方も多数加わっていたいただき、祝賀会がメトロポリタンホテルで盛大に行われました。交流試合での優秀賞の発表や、近年の活躍ぶりが報告され、年代を越えた先輩・後輩の楽しい会話が弾み、歴代の顧問の方も交え思い出話に花が咲きました。また、今回を記念して作られた吉田高校



平成20年度北信大会